

1979.8.10 戦争抵抗者インター日本部(WRI・JAPAN)大阪市あべの区旭町2-2-2(ウリ大塚)

暑中いかがおすごしですか

WRI事務局にしているアパートのまえには、とても大きなくすの木が二本立っている。このくすの木のおかげで鳥や虫が生きて遊んでいる。今朝もはやくからくすの木のまわりを歩きだして、久しぶりに遊びに来て泊って、たのびを遊ばせていた。

なんとなくWRIニュース発行をさぼってしまった。何年ぶりかではないが帰って、ぼんやりと毎夜みて五日ほどおすごした。そのつぎで頭がぼんやりとしていて、いっこうに動く気がわかない。

報告したいこと、これからのおしらせを日誌ふうにつらねてみます。

7月2日

カ2期・原園連市民講座(最終回)が、あなたが主役反原発、はなしの皮きり役としてふうせんがしゃべった。その時の話を再録する。

4月28日にやった女たちみんなあつまれ反原発のデモのことからちょっとだけしゃべります。デモをやったあと、参加したみんなに感想をきいたんです。それをちょっと紹介します。

Aさん「デモというの、これがはじめてやけど、こんなに楽しいもんとは思わなかった。なにかとてもこわいというイメージがデモにあったけど、こんな人もあるんやなあ。こんなやつたらまたやりたいわあー」

Bさん「70年ごろ、私は20才でいまみたいの子供もいなかったのに、結局何もうせんかった。こんど、こどもといっしょにケリシアターをやったりして、我ながらなんでもやってみればや

おしらせ

8月12日

カマの夏祭り 於 三角公園
彫刻入戦争と人間展
(金城史制作)

12日 金城さんの話と映画

13日 金おどり・その他

15日

☆12日夕方サルトンへおいでください。カマへ案内します。

8月14日

◆インディアン女性が来日
今年四月二日から三日間、ミズキニユウインディアン居住地のデララー山で、鉱山会社に抗する初の大規模な全米抗行行動が展開された。その行動の組織者の一人アコマ族のクワイアン・オーティーズさんと14日、私たちと交流をもつ機会ができた。

「...ナバホ族の男は安全服も着てられず、鉱山で15年、20年働いた。現在で日、そのうち20人しか生き残ってあらず、彼らのうち20人以上が肺がんや今までのような病気で死んでしまふ...」

PLP会館 6時半テスト

ドキュメンタリーフィルム
「又米島の虐殺」60分カラー
かいたします。WRIまでお越しください。

宇利乃奈加乃乃安以古登我 (振替 大阪三三七七ウリニヤパン向井孝)

啞天尔乃里越

れるもんやと思つた。まるで青春がよみがえつたよう
や。

Cさんー子どもがデモの世にまにはなるといふんでは
なくて、こどもが出来ることかえつてデモの力にな
てることを実感した。

Dさんー主催者と参加者の差をかんじなかった。ほ
んとに参加して一人一人が主役なんやとかんじれた。
Eー子どもがいるとなかなか外にでるのがあつた
なんやけど、こんなふうにしてこどもをみんなで見
るデモやたら、なんぼでも又これるわ

Fさんーデモを止めて、道路の真中でおしめをい
せいでかえるデモなんて、まさに革命的なことやない
かしら。

Hさんー反原発は、男社会の否定からしか出てこな
いといふことが、今日のデモをやることでどういふこ
とがわかつた。そして、そのことの自信と自覚が新
しい歴史をつなげることだとわかつた。

Iさんー私は、原発のことはまだようしらのやけ
ど、しらん私でも居心地悪くなかつた。だから、体を
動かしながら、ちよつとずつみんなの仲間いりかして
いけそうやと思つた。

Jさんー私はデモの先頭を歩いていたらんやけど、先
頭を歩いていけるというかんじはちよつとさせえんか
つた。うしろの人たちといっしょという気があつた。

Kさんーデモの持ちようもいろいろとしてみ
たい。

Lさんー私はデモの先頭を歩いていたらんやけど、先
頭を歩いていけるというかんじはちよつとさせえんか
つた。うしろの人たちといっしょという気があつた。

Mさんー私はデモの先頭を歩いていたらんやけど、先
頭を歩いていけるというかんじはちよつとさせえんか
つた。うしろの人たちといっしょという気があつた。

らく長々とやらせてしまつたけど、でもこれ
は女たちがやつたからこんなデモが出来たんやとい
うことを強調するつもりはなくて、へ反原発のデ
モだからこそこんなふうな感想が出てきたとい
うことが一つにはあると思つたんです。

というこでいえば、この感想を例にとつてみて
も、反原発運動は、オリーにいままでの「運動」とい
うある固定したイメージからかわりはじめていると
いうこと。

運動のやり方、すすめ方をも変えていこうとして
いる運動やということ。
そして、こどもが出来ることか、じゃまではなく、
むしろ、はつきりと、カとしてあつたといふよう
に、参加するさまじまな個人の条件とか立場を、そ
のありのまま、他の存在と連合出来るような
いままではハンディキャップとしてとらえられて
いたものをむしろヘカとしてひき出すもんやとい
ふことが実感としてわかつた。

というの、私がいままで経験してきた集会とか
デモというものは、おおよそ、いまあげたような感想
が出てくるようなもん、てなかつた。てなかつた。
少くとも私に於いてはね。たとい、それが反体制と
か反権力とか解放とかをスローガンにかかけていて
も、女、こどもの立場からいわしてもらつと、やっ
ぱり弱者として、運動の足手まといとして切りすて

らるんやと思つた。まるで青春がよみがえつたよう
や。

Cさんー子どもがデモの世にまにはなるといふんでは
なくて、こどもが出来ることかえつてデモの力にな
てることを実感した。

Dさんー主催者と参加者の差をかんじなかった。ほ
んとに参加して一人一人が主役なんやとかんじれた。
Eー子どもがいるとなかなか外にでるのがあつた
なんやけど、こんなふうにしてこどもをみんなで見
るデモやたら、なんぼでも又これるわ

られてきた。党派の運動はもちろん、昔のべ平連や市民運動でも、運動というのはやっぱり大部分が男ばかりで、しかも男のなかの「強い」もんがオー線であるという具合だった。それが「セリヤあちよ」とあかしいんとちやうかーというのから「反原発運動のなかではじめて気がかれ、いわれ出してきた」と思うんです。

私たちのデモの「ラカ」どのなかの「つ」は、「原発は男社会の終着駅」というのがあったけれど、「進歩」と「繁栄」をひたすらめざすの石油文明のシンボルとして、権力にとっては最後の「アガキ」として、まさに男社会の極限を示している。と思うわけです。

だから、今、私たち女の前につき出されている問題は、りままでどおり黙って男たちのあとにくっついていって、原発社会にのみこまれ、超管理体制のもとでついに男ともども滅亡するか。

そんなことはまっぴらごめんとして女の解放そのものとしての「反原発」を、めざめたやさしい男たちといっしょに「つ」が今までは全くちがう新しい生き方、新しい人間社会をつくり出すのか、もう二つに一つしかないという事なんです。

この意味で私たちが「何かなんでも原発に反対する」を「反原発」をえらんだんです。もう一つは、もっとはっきりいえば、それはもはや「革命」しかないーと思っっているわけです。

この私たちがいう「革命」とは、りままで男たちが

唱えてきた「革命」の概念をも革命する「革命」なわけです。

いま世界、とくにアメリカ、ヨーロッパの反原発運動の中では、女たちが人道的にも、実力的にもその半分をしつかりと担って、運動をすすめています。日本ではまたまだの状況けれど、しかし、この大阪の地では、私は実感をこめていいますが、反原発運動の中に女たちがどんどん加わって活躍をしています。

女たちが運動の中心で積極的に関与することで、集会のもち方、話し方、デモのやり方、その心構えなんかまでが、少しずつたしかに変わりはじめています。私は感じていきます。

そして、私たち女が反原発運動をすすめていく時まずその基盤にあるのは「非暴力直接行動」やということがあります。

ヨーロッパ、アメリカの反原発運動が「非暴力直接行動」をかかげることによって、運動そのものの変革を追求しながら、革命の概念をもかえていく革命として、具体的に現われてきているーということを見たいと思います。

「反原発」というかぎり、りままで男的な運動の体質というものも変えていかねアカンということは、「反原発」の必然としてあるーという事は、もう多くの人たちがだんだん認めてきていることだ

★三里塚のらっきょう買ってくれそうなお食堂・レストラン紹介してください(三里塚物産・宮城・WRまで)と思います。

「だけど、私たち女からみるとへ反原発」といっても、まだまだ多くの男たちは、いままでの体質からなかなかめくれないように思えます。

しかし、女の解放は男の解放なくしてはない人やがら、私たち女は男たちといっしょに、ひとつひとつの行動のなかで、原子力社会に代る反原発社会の人間関係と生き方を具体化していきたいと思っております。

7月3日

アメリカのWRLのメンバーでもあるジョン・コーン氏が、太平洋非核禁会への帰りに日本にたちより報告をしてください。

「いま、アメリカにとっての原発の市場はオセアニアしかない。自国で売れない、つくれないものをオセアニアにもちこみ、安全と利益を自分たちだけが収奪する。たとえば、メキシコ、フィリピン、韓国、台湾。これらの政府は、アメリカ、日本との経済的ながらみからめ、関係の中で、自国の国民に対する安全性の配慮など頭からぬき下して、手ぬき工事をすすめ、反村運動を禁じ、原発を建設中だ。・・・しかしあらゆる困難の中で、オセアニアの人々は、反原発の闘いに立ちあがっている。彼らの反原発の闘いは、自由の闘いと密接につながっている。自国の政府の弾圧にめげず、闘っているオセアニアの人々に対し、原発をつくり、送り出しているアメリカ、日本に住む我々は、反村運動が出来

集会などの面々あわせは、6.647.4089まで

る状況の中で、彼らともしっかりと深く結びつかねばならない。・・・反原発運動者たちが、力をあわせれば、国際的な行動をおこせると思う。・・・」

7月9日

宮本礼子さん公判

7月10日

不払い連市民講座

7月15日

たんぽぽ図書館一周写のあつまり

一本の差し入れをおして見えてきたもの。ということ。一人一人とても正直に、本音のところを語っていた。はじめは、向題意識もあまりないままフラフラと誘われるままにはじめたのだが、一写たりりま、彼女たちはびつくりするほど変わった。それは国家の本質というものは、きりと見えてしまったのだ。

7月22日

阪和連合結成、天玉寺、和歌山を結ぶ阪和線えん線に住む10人ほどでカループをつくった。カループの行動はじめは、Hさん一家が住む鶴山台

田地で、彼自らが講師となつて、「この夏、電気たらんてホンマ？」という事で、原発の安全性から文明論までどうどう一時向半しゃべった。5千世帯びう入れして、10人ほどの人たちが集まってくれた。どこからでも運動ははじめられる。ということがよくなった。

8月4日

「省エネルギール」納涼散歩

ゆかたを着た人、手に手に反原発のうちわを持ち、鈴をならし、三十人ほどで繁が街をとおって、肉電までいった。さて私たちが帰ったその夜、電線とアンテナなどは